

主 題：七つの教会への使信7 ラオデキヤ教会—なまぬるい教会
聖書箇所：黙示録 3章14-22節

どうぞ新約聖書黙示録3：14をお開きください。

主が教会に宛てた七つの使信、きょうはその最後のメッセージを見てまいります。

A. 「主の使信」 3：14

1. 宛先：ラオデキヤの教会

14節「また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。」と、手紙の宛先がラオデキヤの教会と記してあります。これはエペソの町から今のトルコの内陸の方に150キロほど入ったところにあります。リュコス溪谷沿いにラオデキヤ、ヒエラポリスそしてコロサイという三つの町が存在しました。この町は三つの主要道路の交差するところにあつて、そのもう少し東のフルギヤへの入り口になっていました。ですから、非常に交通の便のいいところでした。また、このラオデキヤは世界的に見ても、商業において最も栄えた町の一つでした。教会もこの豊かに栄えた町の中に存在していました。ラオデキヤは金融業でも有名でした。またさまざまな織物、衣服生産においても有名でした。この地域に飼育されていた羊から黒紫色をした光沢のある柔らかい羊毛が取れたのも有名でした。またここには有名な医学校も存在したと言われています。そのように、この地上において非常に栄えたラオデキヤの町に存在した教会ですが、非常に墮落した状態にあつた教会でした。悲しいことにこのメッセージは主からの厳しい批判が続いています。

2. 送り主：主

まず注目すべきは、このメッセージを送った主ご自身がご自分について語っておられることです。三つのことにお気づきになると思います。まず、14節の後半に「**アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方**がこう言われる。」と三つ出て来ました。主がどういう存在であるのか、どんなお方であるのか、この三つの説明はそのことを私たちに教えてくれます。

1) 「アーメンである方」 イザヤ65：16

最初の「**アーメンである方**」ですが、主イエス・キリストの名前として「アーメン」というのが使われているのはここだけです。イザヤ書の中に、神のことを「アーメン」の神と称しているところがあります。イザヤ65：16を見ると、「この世にあつて祝福される者は、まことの神によって祝福され、この世にあつて誓う者は、まことの神によって誓う。」、ここに「まことの神」という表現が2回出て来ました。ここが「アーメン」が使われているところです。「まことの神」、つまり「アーメン」の神です。ヘブル語の「アーメン」は真理とか真実、また不変といった意味を持ったことばです。ですから私たちがお祈りの後に「アーメン」という言うのは「全くそのとおりです」、「まさにそれは真実です」と言っているわけです。

最初に主はご自分に関して、自分自身は真実な神であると言われ、ゆえに全面的に信頼できる存在だと言われました。真理であり、真実であるお方は言われたことを必ず実現するということです。この方が言われたことを変えることもない、言われたことを確実に、そのとおりに実行される方であると。この後のメッセージは、もし悔い改めなければさばきを与えるという非常に厳しいさばきのメッセージです。このメッセージを語っておられるわたしは「アーメン」の神であり、わたしが言ったことは絶対にそのようになるのだと。聞く者をふるえ上がらせるような真理が最初から語られています。

2) 「忠実で真実な証人である方」

二つ目に出て来るのは「**忠実で、真実な証人**」である方です。注目していただきたいのは「証人」ということばです。このことばは、何かを見てそれを語る人です。私は見たから、事実はこうなのだと言々に告げるわけです。イエス様はご自分のことをこのように言われた。つまりご自分がお語りになることはすべて正しい、真実であると。なぜならすべてのことをご自身が目撃されたからと。イエス様はこれから何が起こるか既に全部ご存じだという話です。だから、言われることに信頼を置くことができるのです。このお方がお語りになることはすべてが真実であり、真理であると二つ目に教えるわけです。

3) 「神に造られたものの根源である方」

三つ目に出てくる「**神に造られたものの根源である方**」というのは、実はいろいろと疑問を呼んでいるところなんです。何が問題かという、このみことばを見た時に、イエス様は創造主ではなくて被造物であるといった考えです。つまりイエスが神であるというイエス様の神性を否定する教えです。どの時代でも、どの場所でもこういった教えは存在しています。実はコロサイの教会にそのような偽りの教えが入ってきました。そこで、コロサイ1章でパウロはイエス・キリストは創造された被造物ではなくて、すべてを創造した創造主なる神だと教えています。なぜそんなことをしたかという、イエスの神性を否定す

る教え——イエスは神ではなくて、創造主ではなくて、我々被造物と同じように創造された存在であるといった誤った教えが教会に入り込んできたからです。なぜこんなことを言っているかという、コロサイの町と今私たちが見ているラオデキヤは物すごく近かったのです。コロサイ4：16にコロサイの手紙がラオデキヤでも読まれるようにと記してあります。こういう手紙は巡回して行ったのです。コロサイに与えられた手紙というのは、そこでとどまって終わったのではなくて、次の町でも読まれたのです。それほどこのコロサイとラオデキヤは距離的に近かったのです。ですから間違いなくコロサイの異端がラオデキヤにも入り込んでいた。そこで主はご自身に関して被造物ではなくて創造主だということをこの14節の一番最後で明らかにしておられるのです。

◎ 「先に生まれた」

ここで、主がすべてのものの根源である、主によって、イエス様によってすべてのものが造り出されたのだと教えるのですが、先ほどもお話ししたように、コロサイに入り込んで来た異端に対してパウロが語ったところを少し見てみたいと思います。コロサイ1：15に「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。」と出て来ます。こういうことばを見ると、多くの人たちは「先に生まれた」ということは、ほら見ろイエス様だって造られたんじゃないかと思うわけですが、実はここで言われていることはそういう意味ではないのです。ここで言われた「先に生まれた」というのには二つの意味がありました。

① 時間的な意味

一つは時間的な意味です。この地球上のすべてのもの、宇宙のすべてのものが造られる前から、主が存在しておられるという意味です。すべてのものより先に造られたというのではなくて、すべてのものが存在する前から主は存在していたのだという意味です。

② 地位的な意味

もう一つの意味は、主の身分や地位の話です。「先に生まれた」というのは、イエス・キリストはあらゆるものよりもはるかに優れたお方であり、最高の、至高の存在であるということをお教えているのです。彼に勝るものは存在していないということです。創造されたということをお教えているのではなく、すべてのものよりも先に存在しておられた方であり、すべてのものはこの方によって造られたのだということをお記したに過ぎなかったのです。

それが証拠にヨハネの福音書1：3に「すべてのものは、この方によって造られた。」と記されています。すごくはっきりしています。では「この方」というのは一体だれなのかです。ヨハネ1：1-2節に説明が加えられています。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」、この「ことば」はだれなのか——。神だというわけです。「この方は、初めに神とともにおられた。」と。そして14節に「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」と。神である方、そして人となられた方、イエス様の話です。3節「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」と。ですから、イエス様がすべての創造主であり、すべての造り主なる神だということをおみことばは私たちに明らかにしているのです。

主はこの黙示録3章の中でそのことを改めて明らかにされました。すべてのものの「根源」である、この方によってすべてのものが創造されたのだと。だから私たちは神がお造りになったものを見た時に、私たちの神がどんなお方であるかを見ることができます。自然の美しさを見た時に、私たちの神様というのは本当に美しい方であることを知ることができます。そこに存在するさまざまな法則を見た時に、この方は知恵のある方であり、我々はその知恵を十分理解することができない存在であることがわかります。こうしてすべてのものはこの方によって造られ、主ご自身がすべてのものの根源であることをご自分のことを教えておられる。この主はこの古い地と古い天、すべてのものの創造主だから、我々が期待する新しい天と新しい地を造ることができるのです。主はまずそのことをこの教会の人々に伝えられたのです。

B. 「主の評価」 3：15、17

さて、主の評価がその後、特に15、17節に下っています。まず15節「わたしは、あなたの行ないを知っている。」、この表現が繰り返されていました。「知っている」と、それが強調されているのですが、主はこのラオデキヤの教会のすべてのこと、すべての人々の心の中をご存じで、その方が「あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。」と言われるわけです。このラオデキヤの教会のすべての人たちのことをだれよりも知っておられる神が、この教会に対して下した評価は実は二つです。一つはこの群れは救いについて盲目だということ、そして同時に彼らは真理についても盲目であると主は言われています。

1) 「救いについて盲目」

(1) 「熱い」

「熱い」と記されています。このことばは熱心、沸騰するほどの熱さという意味を持ったことばです。このことばは新約聖書の中で2回出て来ますが、どちらも「靈に燃えて」と訳されています。使徒18：25に「靈に燃えて」とあります。文語訳でこの箇所は「熱心にして」となっています。ローマ12：11にも「勤勉で怠らず、靈に燃え、主に仕えなさい。」と訳されています。ここも文語訳では「心を熱くし」とあります。ですからこの「熱い」ということばは熱心さを表しています。まさに信仰的に非常に生き生きとしている人の話です。主を喜び、主に感謝し、その信仰生活はまさに主のすばらしさを証するような人です。私たちの群れの中にもそういう人がたくさんおられます。健全な熱心さを持っておられた人たちはです。これがこの「熱い」という意味です。

(2)「冷たい」

二つ目の「冷たい」ということばは、水が凍るほど冷たいという意味です。半端でなく冷たい状態です。先ほどの「熱い」というのは非常に熱心なクリスチャンのことでしたが、この「冷たい」というのはその真逆、救われていない人のことです。この人は福音に全く興味を示そうとしません。公に否定するだけではなく、時には福音を信じる者たちを迫害したり、攻撃するような人です。信仰において、神に対して全く無関心なだけではなくて福音に対して反抗的な歩みをしている人たちです。

(3)「なまぬるい」

この両極端が挙げられています。真ん中に出て来る「なまぬるい」人たちというのは、熱さにも属していないし、冷たさにも属していないのです。よく私たちは「なまぬるい」クリスチャンたちと言って、信仰的に弱っているクリスチャンたちをこんな表現で呼びます。でもここで教えている「なまぬるい」人たちというのは、実は救われていない人たちのことだと見ることができます。

では、この人たちも救われていないとするならば、彼らと冷たい人とはどこがどう違うのかです。なまぬるい人というのはこういう人です。公には福音を否定しないのです。また攻撃的でもありません。彼らは教会の集会にも集うでしょうし、質問すると、「はい、私はクリスチャンです」と言うでしょう。しかしそれでいながら救われていないのです。さまざまな奉仕の働きをしているかもしれない。聖書的な知識もあるため、聖書的な質問に対してもちゃんと正しく答えることができるかもしれません。ですから外側から見ていると、信仰的に非常に熱心な人です。しかしそれでいて救われていない。ご存じのようにそういう人々は存在しています。マタイ7：22-23の中に出て来た、主が警告を与えた人々のことを思い出してください。救われていると思っていながら実はそうでなかった人たち、彼らの言い分をもう一度思い出してください。大勢の人がその日には主に対してこんなことを言うであろうと書いてあります。マタイ7：22『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』、さまざまな働きをしていたのです。それを見ていた人々は間違いなく彼はクリスチャンだと思っていたでしょう。ところが主がこんなことを言われる。「23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」、このような警告のメッセージがあります。救われていると思っていながらそうでない人々がたくさんいるという話です。

イエス様は「わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。」と彼らのことを非難しておられる。それはなぜかという、「なまぬるい」人への働きかけというのは大変難しいからです。例えばある信仰のことに反対している人がいるとします。どこにその人が立っているかわかっていますから、その点を話せばいいわけです。私がグアム島に住んでいたある時、夜中に電話をもらって、電話口で「あなたは何を教えているのですか。」、こう言われました。私は日本人の聖書研究会をしていたので、「聖書を教えています、イエス様の話をしています。」と答えました。そうするとその方は「気持ち悪いです。というのは私が目覚めた時に家内は寝室におらず、どこにいるかと思ったらリビングで聖書を読んでいる。」と、それで許可をいただいてその夜訪問し、翌日もう一度行くチャンスを与えられました。今その方はイエス様を信じてハワイで働きをしておられます。反対する人だったら、何を反対しておられるのかわかりますから、話もしやすいのです。この「なまぬるい」人というのはわからないのです。質問すると答えは返って来るけれども、心は神に開いていない。何を考えているのかわからないのです。

ダラス神学校の元学長であったジョン・ウォルヴールド先生が「内面的な現実性がないのに、外面的な信仰的礼拝に参加している者の例を示しているのである。」と言っています。つまり救われていないのに、礼拝を捧げ、クリスチャンのような行為をしているということです。彼らの一番大きな問題は、自分の救いについて盲目だったことです。自分の信仰を吟味することもなく、もう自分は救われているのだと一方的に思い込んでいた。

2)「真理について盲目」

二つ目の彼らの問題点は、真理について盲目だったことです。17節に「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らな

い。」とあります。彼らは自分の本当の姿に気づいていないのです。本当は自分たちが霊的に破産状態にあること、つまり救われていない人はいのちの源であり、祝福を与えてくださる神様とつながっていないということ、そのような神様から引き離された、霊的にどうすることもできない罪の中を生きただけに過ぎないことに。そういう状態でどうやって神の祝福を経験することができます？神に背いている人たちのことを霊的に破産した状態というふうに言いますが、彼らはそういう状態にいた。本来ならば救いが必要なことに気づくはずなのに、彼らはそのことに全然気づかず、かえって自分たちは豊かである、自分たちは祝されていると思い込んでいる。こういう状態に彼らはあるのだということを主はお話になっておられます。

最初にもお話ししたように、コロサイの方から偽りの教師が入って来て、多くの人たちを惑わしていたのでしょ。確かにそういうこともあったかもしれませんが、私たちに必要なことは、どんな時でも神様のおことばに立つことであり、いろいろな話を聞く時に私たちはそれが聖書的なのかどうかをちゃんと吟味しなければいけない。その責任は皆さんにあります。いろいろな人たちがこれが真理だと言って教えます。でもそれが神のことばと一致していなければそれは真理ではないのです。私たちが知りたいのは聖書が教えている神の真理です。人間の話なんて聞いても意味がない。だから皆さんがいろいろなところで、ラジオや最近だとインターネットなどを通していろいろな話をお聞きになる時、吟味すべきはそれが本当に聖書の教えなのかどうかです。いろいろな機会に私もそういう話を聞かせていただきますが、講解説教だと言い、確かに聖書を読んでいながら自分の話をされている教師たちもいます。神様のおことばを使って自分の言いたいことを語っている教師たちもいます。聖書が教えていないことをあたかも聖書の教えであるかのように語っている教師たちもいます。私たちは賢くならなければいけない。私たちが聞いていることが、本当に神の言われていることなのか、聖書が教えていることなのか、そういうことをちゃんとしないといろいろな教えに流されてしまうということです。いろいろなことに惑わされてしまう。ひょっとしたらこの教会はそういうことが原因で神様に背き続けていたのかもしれない。

C. 「主の警告」 3:16

さて、我々が三つ目に見るのが16節、主の警告です。「このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。」と。主がここでこんな表現をされています。まさにここで言われている「吐き出」すというのはさばきのことです。

実はこのことを我々が正しく理解するためには、私たちは水のことについて少し知ることが必要です。ラオデキヤはヒエラポリスやコロサイから水を引いていました。そういった地下の送水路、パイプが今発見されています。ラオデキヤとヒエラポリスは10キロもありません。ヒエラポリスには温泉がありました。そしてコロサイにはきれいな泉があり、そこには冷たい水がありました。温泉は熱いお湯です。ヒエラポリスからラオデキヤへ熱湯を引いて来ると、約10キロもたつと熱かったお湯がなまぬるくなってきます。考古学上、まだ発見されていないし、その証拠も見つかっていないと言われていますが、コロサイとラオデキヤの間にもこういった送水路が実際に存在した可能性はあるのです。そうすると、コロサイから来る冷たい水は、ラオデキヤに着いたらもう冷たくなってしまっている。それを口にしたらまずいから吐き出してしまいます。そういったことが実際に起こっていたのです。

そこで主はそれを使って、この教会に目を覚ますようと、ここで「吐き出そう」とお話になったのです。もう水は熱くもないし、冷たくもない。救われていると思っていながら実は救われていない人々に対して、神はさばきを行なうのだということを警告したわけです。自分たちは神に喜ばれていると思っていたこのラオデキヤの教会。ところがこの教会は神様の気分を害していたのです。吐き気を催すような、そんな状態だった。だから我々は自分自身を吟味することが必要なのです。自分だけの思い込みというのは恐ろしいものです。

D. 「主の忠告」 3:18、19

さて、警告の後、主の忠告が記されています。三つの「買いなさい」ということばが18節の中に出て来ます。「わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。」とあります。結論から言うと、これは救いへの招きです。イザヤ書55:1でイザヤが「渴いている者はみな、水を求めて出て来い。金のない者も。さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買、代価を払わないで、ぶどう酒と乳を買え。」と言います。このすばらしい祝福は、私たちが何かを支払ったゆえに手に入れるものではないからです。主が与えてくださるものだから、救いを求めながら主のもとにやって来るようにと教えます。

非常に興味深いのは、主はラオデキヤの人々が誇っていた三つのことを挙げてこのメッセージを語ります。その一つが富み、二つ目は衣類、三つ目は目薬です。実はこれがこのラオデキヤの人々が誇って

いたものでした。

1) 富：「火で精練された金をわたしから買いなさい。」 18節

まず最初に富み、18節に金のお話が出て来ます。「火で精練された金をわたしから買いなさい。」と。「豊かな者となるために」と書いてあります。彼らは物質的に豊かだと思っていたのです。主は物質的ではなくて、霊的に豊かになりなさいと言われるのです。この町がいかに物質的に繁栄していた町であったかをパークレーがローマの歴史家のタキトゥスという人物のこぼしを引用して教えてくれます。「アジアで最も有名な都市の一つであるラオデキヤは、同じ年に地震によって壊滅したが、外部からの援助を受けず、独力で再興した。」と、その歴史家は言います。ほとんどの町は、自分たちの町が地震で崩壊したら、ローマからお金を借りたりして町を建てました。ところがラオデキヤはその必要がなく、町を再興するだけの富を持っていた、非常に豊かな町だったのです。だから、自分たちは豊かだと思っていたのです。そこで主は、確かに物質的にはそうかもしれないけれども、もっと大切なもっと価値あるものがあると言われたのです。お金よりもっと大切なものがあると。ここで「金」を使っています。しかも不純物の限りなく少ない金は大変高価なものです。主が言われるのは、あなたたちが持っているものよりもっと高価なものがあるのだと。それは救いの話です。どんなにこの地上の富を蓄えても、いのちを損じたら何もならない。この地上のあらゆるものより、あなたたちが持っている富みよりもっと大切なものがあると。この「金をわたしから買」えと言っています。つまりそれよりもっと価値のある、最も高価なものを私から買いなさいと。私はそれを提供することができる。私は救いを与えることができると言われたのです。

2) 衣類：「着る白い衣を買いなさい。」 18節

二つ目に衣類のお話をしました。18節に「あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。」とあります。当時の彼らにとっては「裸」にされるとということが最大の屈辱であり、恥辱でした。ですからその体を着物で覆うわけです。最初にもお話ししたように、ここにはある羊がいて黒紫色の光沢のある大変すばらしい羊毛を人々に与えていました。ですから、ラオデキヤの人々はそういう高価な羊毛の洋服を持っていたかもしれないし、そういうものを身につけていたかもしれない。主は、あなたたちが持っているどのような洋服よりもはるかに価値のあるものを求めなさいと言われる。「白い衣」と書いてあります。白いというと我々が思うのはきよめの話です。あなたの罪をきよめてくれる衣の話です。あなたの罪を洗い、そしてきよめてくれるもの、救いの話です。それが大切であることをお教えになるわけです。

また特にここで、「白い衣」と言われていますが、ただ救いの話だけではなくて、救われた者が歩む義なる行ないの話を強調しているように思えるのです。というのは、黙示録19：8に「花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行ないである。』」と書いてあります。救いの話ですから、義なる行ないのことを強調したと見ることができます。なぜそんなことをわざわざしたのかというと、ラオデキヤの教会の人たちは救われていると思っていたのです。そう思っているが、彼らには全く義なる行ないがなかったのです。そこで主は救いに与った者たちは間違いなく、救い自体が義なる行ないを生み出して行くのだと言われたのです。義なる行ないをもって救われる人はどこにもいません。正しいことをしたから神は私を救ってくれたかということ、救ってくれません。なぜかということ、我々の行なう正しいと思う行ないもすべて神の基準から外れているからです。我々は信仰によって、その恵みによって救いに与りました。でも神が下さる救いというのは、神によって救われたことを現わす正しい行ないが伴って行きます。それがなかったこの人々、それでいて自分たちは救われていると言っていた彼らに、本当の救いはそのような正しい行ないを生み出すものであって、その「白い衣」を私から買いなさい、本当の救いを得たら、あなたたちは生まれ変わり、あなたたちは新しい義なる行ないを始めて行くことになるのだと。その衣を買うようにと二つ目に勧めています。

3) 目薬：「目に塗る目薬を買いなさい。」 18節

三つ目に目薬のお話が出て来ました。「目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。」と。最初にもお話ししたようにラオデキヤには、医学校、今で言う医学部がありました。実はこの町は二つのことで世界的に有名だったと言われます。一つは耳につける軟膏が有名でした。もう一つは目に塗る薬でした。フルギヤの粉末と言われて、ラオデキヤの人たちは目を癒す医术を持っていたと言われていました。またこれはパークレーから引用するのですが、「このフルギヤの粉末は弱った痛む目のためには絶対に効く薬であると考えられていた」と言われます。ですから彼らは我々の町にはこういう薬があると自慢していたのです。主は、でもその目薬はあなたの心の目を開くことができないという話をなさるのです。大切なのは肉体的な目ではなくて心の目です。彼らは霊的であると自負しながら、実のところは霊的な真理が見えていなかったのです。霊的な真理を知ることが不可欠であると。そこで主は「目に塗る目薬を買いなさい。」、私から買いなさいと。そうすることによってあなたの心の目が見えるようになるからと。

イエス様は救いの話をされたのです。こうして彼らが自慢していたものを用いて、あなたたちが自慢していることよりもっと大切なことがある。それを提供することができるのは私だと。私からそれを買いなさい、私だけが救いを与えることができるから、私からそれを受け取りなさいと言われるわけです。

4. 「熱心になって悔い改めなさい」 19節

1) 「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。」

四つ目の忠告は、19節「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。」と記されています。この「愛する者をしか」とありますが、このように記されているところから、先ほどの「なまぬる」い人は信仰的に弱いクリスチャンのことであると、ある人たちは主張するのです。なぜかという、19節に「愛する者」と書いてあるから彼らはクリスチャンだと言うのです。でも主は救い主を受け入れていない、まだ未信者の人たちに対しても愛を持っておられます。ですからこの19節を見て一概にこれはクリスチャンに対するものであると言い切れません。

また、もう一つ言えることは、文脈を見ると、今まで見て来たのは全部救われていない人たちに対する神様からのメッセージでした。18節の教えは明らかに未信者たちに語った教えです。またこの後の20節に、主を迎え入れるという話が出て来ます。これも救いの話です。クリスチャンはもう既に救い主であるイエス様を迎え入れたわけですから、もう既にイエス様が私たちのうちにおられるのですから、その人はまた改めて迎え入れる必要はないのです。この文脈が明らかに教えるのは、これはまだイエス様を知らない人々、信じていない人々に対するメッセージです。ですから、「なまぬる」い人も信仰的に弱い人ではなくて、この信仰に与っていない人であると思うわけです。

(1) 「しかったりされる」

さて、19節を見ると、まず主は「愛する者をしかったり」なさると書いてあります。この「しか」というのは、何かを明るみに出すとか、暴露するという意味です。つまりここで言われていることは、叱られている相手が自分の非に気づくように働かれるということです。ただ非難を浴びせて怒りをその人にぶつけるというのではなくて、聞いているその人が自分の過ちに気づいて、その誤った生活や選択を悔い改めて正しいことを行なって行こうと決心するように導いて行く。

そのようにして神は私たちのうちに働かれました。神が私たちのうちに働いた時に自分の罪深さに気づかされました。自分は救いが必要だということに気づかされ、そしてこの救い主へと導かれて行った。そのように神はあなたのうちに働いたのです。神は確かにそのように「しかったり」されるのです。その罪人が自分の過ちに気づいて罪から離れて正しい歩みをして行くように導かれるのです。そのような働きをするということがここで教えられているのです。

(2) 「懲らしめたりされる」

「懲らしめたり」されるとあります。これは神様の罪人に対するさばきの話です。ですから19節で言っているのは、「わたしは、」つまり主が、主なる神が罪人の心に働いて、彼らに本当に救いが必要なんだと気づかせるように働くし、そしてその働きを拒む者たち、この救いを拒む者たちには必ずさばきを与えられたのです。

2) 「熱心になって悔い改めなさい。」

「だから、熱心になって、悔い改めなさい。」と言うのです。神のさばきがあるから熱心になってみずからの罪を悔い改めて、主の救いを受け入れなさいと勧めるわけです。

E. 「主の約束」 3:20、21

そしてその救いを受け入れた者たち、またもう既に救われていた教会の人たちに対して20—21節にこんな約束が記されています。「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたか。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」と。

1. 「彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」

まず最初に出て来るのは、「わたしは、戸の外に立ってたたか。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、」、主ご自身がその人のうちに入って、彼とともに食事をするという教えです。

1) 「その意味」

これは救いの話です。主が扉をたたいておられて、その扉を開いて主を迎え入れるならば、主は中に入ってその人と一緒に食事をすると。この「食事をする」というところで使われているギリシャ語は、夕食を表しています。なぜかという、その当時の人々は夕食に大変な時間をかけたからです。一日の食事の中で最もゆっくりとくつろいで食事をする時間が夕食だったのです。ですからその習慣の中を生きている彼らに対して、私の声を聞いて心を開いて私を受け入れる者たちと私は豊かな交わりを持つようと。救われた者たちに与えられた、約束されたすばらしい神様の祝福の話です。

2) 「その条件」

でも、「わたしの声を聞いて戸をあけるなら」と条件があります。なぜなら主はたたいておられるから。このことばは救いのトラクトなどによく書かれています。でも一義的にはこれはラオデキヤの教会に対する神様のメッセージであったことを覚えておくことが必要です。ラオデキヤの教会の冷たい人たちやなまぬるい人たち、そういう未信者に対してこのメッセージを主がお与えになったのです。心を開け、その時に私はあなたと豊かな交わりを持とうと言うのです。

2. 「わたしとともにわたしの座に着かせよう。」 21節

そして二つ目の約束は、先ほどお読みした21節に「わたしとともにわたしの座に着かせよう。」とあります。「それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」と。主イエス・キリストがこの地上にご自身の王国を築かれる時がやって来ます。王座に着かれた主はすべてのものを支配なさるのですが、その時にクリスチャンであるあなたも主とともにすべての人々を治めるという約束です。主がこの地上に千年王国を築かれる時に、信仰者たちは、クリスチャンたちは、つまりあなたは主イエス・キリストとともにすべての人々を治めるという約束が確かに聖書の中に記されています。ルカ22:29-30に「わたしの父がわたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたがたに王権を与えます。それであなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食事をし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」という約束がされています。イエス様とともにすべてのものを治めるという約束です。

F. 「使信への傾聴」 22節

そして最後に、22節「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。』』」、またこのメッセージでもって終わります。主が言われることに耳を傾けなさいと。

我々はラオデキヤの教会の事を見て来ました。主によって救われた熱心な者たちもこの教会にいました。しかしどうもこの教会には、主を信じていない人々が多くいたことがわかりました。そして主は彼らのことも愛しておられ、救いの機会を与えておられる。悔い改めなさいというメッセージを与えられました。悔い改めてこの主イエス・キリストによって備えられた完全な救いを信じ受け入れるようにと。もしこの中でこの救いを受け入れておられない方がいるなら、今、主はあなたに同じメッセージを与えてくださっています。皆さん、あなたの救いは大丈夫ですか？きょう死んでも間違いなくあなたは主のもとに行きますか？そのことを考えることです。救いは主によって備えられています。主が拒んでいるのではなくてあなたが拒んでいるのです。救われておられる皆さん、これまで以上に熱心にさっき見たように熱い信仰者、沸騰するほどの熱さをもって熱心に主に仕え続けて行くことです。それが主によって贖われた私たちの主の前に正しい歩みです。どうぞそのような歩みをもって主にお会いするその日を待ち望みながら歩み続けてください。この一週間も主の助けをいただきながら一緒にそのような歩みを実践していきましょう。

〈考えましょう〉

1. 信仰において「熱い人」、「冷たい人」、そして「なまぬるい人」を説明してください。
2. 「わたしから買いなさい」と言われた3つのものを説明してください。
3. 「アーメンである方」、「忠実で、真実な証人である方」、「神に造られたものの根源である方」とはどのような意味かを説明してください。
4. (質問3では、主イエスがどのようなお方であるかについて考えました。) さて、そのような主を信じているあなたに、主が期待しておられる生き方とはどのようなものかを記してください。